

ペスをさがしに

小川未明

青空文庫

どようび
土曜日の晩ばんでありました。

お兄にいさんも、お姉ねえさんも、お母かあさんも、食卓ちやぶだいのまわりで、
いろいろのお話はなしをして、笑わらっていらしたときに、いちばん小ちいさい
政まさちゃんが、

「ぼく、きようペスを見みたよ。」と、ふいに、いいました。
すると、みんなは、一時じにお話はなしをやめて、政まさちゃんの顔かおを見み
ました。

「政まさちゃん、ほんとうかい。」と、正しょうちゃんが叫さけびました。
「ほんとうに、見みたよ。」と、政まさちゃんは、まじめくさつて答こたえ
ました。

「まあ、逃げてきたんでしようか？」と、姉さんは、おどろいた顔つきをなさいました。

「ペスなら、逃げてきたんでしよう。よく逃げてこられたものね。」と、お母さんは感心なさいました。

「ペスでない、きつとほかの犬だよ。政ちゃんは、なにを見たのかわかりやしない。」と、いちばん上の達ちやんが、いいますと、「うそかい、ぼく、ほんとうに、見たんだから。」と、政ちゃんは、目をまるくしました。

みんなが、そう疑うのも、無理はありません。昔から、犬殺しにつれられていつて、帰ってきた犬は、めつたにないからです。「お母さん、ほんとうでしょうか。ペスだったら、いいけど。」

と、お姉^{ねえ}さんは、いいました。

「ペスだったら、うちで、飼^かってやろうね。」と、正^{しょう}ちゃんが
いました。

「印刷^{いんさつ}屋^やの犬^{いぬ}じゃないか。」

「だって、あすこでは、もうかまわないのだもの、どこのうちの
犬^{いぬ}でもないだろう。」

お兄^{にい}さんたちは、この後^{のち}、ペスをどうしてかばってやったらい
いかと議^ぎ論^{ろん}をしました。

「まだ、ほんとうに、ペスかどうか、わかりやしないじゃないの
。」と、お姉^{ねえ}さんが、いいますと、お母^{かあ}さんは、ぼんやりとして、
お兄^{にい}さんたちの話^{はなし}をきいている、政^{まさ}ちゃんをごろんになって、

「もう、政ちゃんまさは、ねむいんでしょう。きつとパスかえの帰かえつてきた、夢ゆめでも思い出おもして、いつたのでしょう。」と、笑わらいながら、おつしやいました。

「あるいは、そんなことかもしれん。」と、いままでパスこんごの今後こんごの相談そうだんをしていた、達ちゃんたちと正ちゃんしょうは、そのほうはなしの話を中ちゆう止ゆうしして、もつと、くわしいことを知しるために、

「政ちゃんまさ、どこで、パスを見みたんだい。」と、まず正ちゃんしょうは、たずねました。

「橋はしのところで、遊あそんでいて、見みたんだよ。」

「政ちゃんまさ、ひとりしか、パスを見みなかつた？」と、正ちゃんしょうは、さらに、ききました。

「健けんちゃんも、徳とくちゃんも、みんな見たから……。」「と、政まさちゃんまぎは、疑うたがわれるのが、不ふ平へいでたまらなかつたのです。

「じゃ、明あした日じつ、徳とくちゃんまぎなんかまぎにまぎきいてみるよ。うそなんかまぎいたら、承しょう知ちしないから。」「と、正しょうちゃんまぎが、いいますと、

「なにも、怒おこることはまぎないでしょう。」「と、お姉ねえさんまぎが、正しょうちゃんまぎをまぎにまぎらみまぎました。

「だって、うそをつくことは、わるいことじゃまぎないか。」「

「うそをつこうと思おもつてまぎいったのでまぎない。まちがいまぎというまぎことは、あるもんでまぎしょう。」「と、お姉ねえさんまぎが、おいまぎいなまぎさると、

「まちがいまぎじゃない、ほんまぎとうまぎに、ペスまぎだまぎつたよ。」「と、政まさちゃんまぎは、頭あたまをまぎ振まぎつて、がまぎんまぎばりまぎました。

お母^{かあ}さんも、お姉^{ねえ}さんも、政^{まさ}ちゃんの、いつにない真^{しん}剣^{けん}なよ
うすを見て^み、おかしそうに、お笑^{わら}いになりました。

「なぜ、政^{まさ}ちゃんは、ペスを呼^よばなかったのだい。」と、いちば
ん年^{とし}上^{うえ}の達^{たつ}ちゃん^が、こんどは、たずねました。

「ぼく、ペス、ペスと呼^よんだよ。」

「そうしたら。」

「こつちを、じつと見^みたよ。」

「飛^とんで、こなかつたかい？」

「いくら、呼^よんでも、こなかつた。そして、とつとと、あつちへ
いってしまつた。」と、政^{まさ}ちゃん^が答^{こた}えました。

「どつちの方^{ほう}へ、いってしまつた。」と、だまつてきいていた、

しょう
正ちゃんしょうが、きききました。

「原はらつばの方ほうへ、川かわについて、とつとと、いってしまつたよ。あつちの、赤あかい空そらの中なかへ、はいつていつてしまつたよ。」

政まさちゃんまさは、寒さむい、木こ枯がらしの吹ふきそうな、晚ばん方がたの、なんとなく、物もの悲かなしい、西にし空ぞらの、夕ゆう焼やけの色いろを、目めに描えがいたのです。「どつちから、ペスが、歩あるいてきたか、知しっている？」と正しょうちゃんしょう

んは、政まさちゃんまさに、たずねました。

「市いち場ばの方ほうから、歩あるいてきた。」

「そのとき、ほかの子こは、ペス、ペス、と呼よばなかつたの。」と達たつちゃんたつがききました。

「呼よんだとも、健けんちゃんけんも、徳とくちゃんとくも、呼よんだけれど、ペスは、

振り向かんでいつてしまったよ。」

お母^{かあ}さんも、お姉^{ねえ}さんも、政^{まさ}ちゃんも、そういうのをきくと、はたしてペスが帰^{かえ}ってきたのかしらんと考^{かんが}えるようになりました。そして、子^{こども}供^{ども}たちの話^{はなし}を、いまは、じつときいていられたのであります。

「おかしいね、あんなに、いつも、走^{はし}つてきて飛^とびつくのに、呼^よんでも、こないのは……。」と、達^{たっ}ちちゃんが、頭^{あたま}をかしました。「おかしいね。やはり、ペスでは、ないんだらう。」と、正^{しょう}ちゃんがいいました。

「ペスだよ。」

「そんなら、どうして、呼^よんでもこなかったのだい、政^{まさ}ちゃんに

わかる？」と、正ちゃんしょうちゃんが、いいました。政ちゃんまさちゃんはだまっています。お母さんかあも、お姉さんねえもしばらく、政ちゃんまさちゃんの顔かおを見みていられました。

政ちゃんまさちゃんは、頭あたまの中なかでは、わかつているが、どう言葉ことばに、あらわしたらいいかと、惑まどっているようすでした。が、どもりながら、「また、人間にんげんが、だますと思おもったから、こなかつたのだろう……。」と、いいました。

「だますから？」と、正ちゃんしょうちゃんが、ききかえすと、「政ちゃんまさちゃんのいうことは、よくわかるじゃないの。いつも、あんなに、かわいがつていて、見殺みころしにしたからというのだよ。」と、お姉さんねえは、目めに、涙なみだがためていらつしやいました。

「ほんとうに、そうだな。すぐにわかったら、もらいにいってやればいいに、印刷屋いんさつやでも、うちでも、まただれも、犬殺いぬころしにつれられていったぎり、もらいにいってやらなかったのは悪いわると思う。おも」と、達たっちゃんも、同意どういしました。

ひとり、達たっちゃんばかりでありません。みんなは、政まさちゃんの、いうことをきいて、ほんとうだと思おもいました。平常ふだん、かわいがつていながら、パスが、犬殺いぬころしに、つれられていったと知しつても、もらいにいってやらぬというのは、なんたる不人情ふにんじょうなことだろう。パスは、心こころのうちできつとだれかもらいにきてくださると思おもっていたのにちがいない、そして、とうとうだれもきてくれないと知しると、死しにももの狂ぐるいで逃にげ出だしてきたのだ。心こころのうちで、み

んなの 不人情ふにんじょうをうらんでいるのだ。もうけっして、人間にんげんを信しんじてはならない。それは、政ちゃんまさちの、いうとおりだと思おもったからです。

「まあ、それにしても、よく逃げ出だして、きたものね。」とお姉ねえさんは、感嘆かんとんなさいました。

「生いきたい、一念ねんで、逃にげ出だしてきたのでしよう。」と、お母かあさんも、おっしゃいました。

「ワン、ワン、ほえたり、かみついたりしたんだらうな。」と、正しょうちゃんが、いうと、

「ばか、そんなことをすれば、すぐなぐり殺ころされてしまうじやないか。」と、達たつちゃんがいました。

「そんなら、どうして、逃げてきたんだい。」と、正ちゃんが、ききました。

「すきを見て、いつしようにけんめいに逃げてきたんだろう。」と達ちやんがいました。

その夜は、ペスが帰ってきたことにして、みんなは、いろいろ話をしましたが、夜が、明けたら、それを、たしかめようと、達ちやんと、正ちゃんとは、めいめい胸に思つて、やがて、床の中に入つたのであります。寒い晩で、木枯らしの音がきこえていました。床にはいつてからも、正ちゃんは、風の音に耳をすまして、逃げてきた、かわいそうなペスのことを思つて、なかなか眠りつかれなかつたのでした。

翌よくじつ日は、日曜日にちようびでした。朝飯あさはんを食たべると、正ちゃんしょうは、外そとへ駆かけ出だしてゆきました。往來おうらいで、徳ちゃんとくたちが、遊あそんでいました。徳ちゃんとくは、政ちゃんまさと同じ年おなとしごろでした。

「徳ちゃんとく、ペスが帰かえってきたつて、ほんとうかい。」

正ちゃんしょうは、徳ちゃんとくの顔かおを見みると、すぐこうたずねました。

「ああ、昨日きのう見みたよ。」と、徳ちゃんとくは答こたえたのです。

「ほかの犬いぬだろう。」

「そうじゃない、ペスだよ。日ひの丸まるが、ついていた。」と、徳とくち

ゃんは、いいました。

「日ひの丸まるが、ついていた？」と、正しょうちゃんは、念ねんを押おしました。

日ひの丸まるというのは、ペスの白しろい脊せな中なかに赤あかい毛けのまるい斑ぶちがあつた

ので、みんながそういつていたのです。

「日の丸ひまるがあつたよ。」と、徳とくちゃんははつきり答こたえました。

そうきけば、もうペスの帰かえつてきたのに、疑うたがう余地よちがなかつたのです。正しょうちゃんは、走はしつて、家いえへもどると、その話はなしを達たつちゃんにしたのです。

ちようど、そのとき、小田おだと高橋たかはしが、釣つりざおとバケツを下さげて達たつちゃん兄きょうだい弟せを誘さそいにきました。日曜にちようび日に、川かわへ寒かんぶなを釣つりにゆく、約やくそく束たばがしてあつたからです。

「どうしよう？ ペスをさがしにゆくのをよして、釣つりにゆこうか。」と、正しょうちゃんは、兄あにの達たつちゃんを見上みあげました。

「おまえは、釣つりにいつてもいい。僕ぼくは、ペスをさがしにゆくか

ら。「と、達ちやんが答えました。

小田も、高橋も、よくペスのことを知っていました。達ちや

んと正ちゃんの話をしきくと、

「僕たちも、いっしよに、ペスをさがしにゆこう。そして、はや

く見つかったら、みんなで釣りに出かけよう。」と、小田がいい

ますと、高橋も賛成しました。

「釣りざおとバケツを、ここに置いてくれない。」

やがて、みんなが、一団となつて、ペスをさがしにゆきました。

その中に、小さい政ちゃんもはいつていました。

橋のところから、ペスのいつたという、道を歩いて、原っぱへ

出て、半分は、散歩の気分、愉快そうに話しながら、足の向

く方ほうにあるいていったのであります。

あちらに、自動車じどうしゃや、自転車じてんしゃの走はしっているのが見みえる、駅えきの付近ふきんにきたとき、

「ほら、あすこに、パスがいるじゃないか。」と、ふいに政まさちゃんまが、指ゆびさしました。見みると、なるほど、牛ぎゅう肉にく屋やの前まえに白しろい毛けに日ひの丸まるの斑ふちのはいつた、パスそつくりの犬いぬがいました。

「パスかしらん。」と、正しょうちゃんまは、駆かけ出だしてゆきました。あ
とから、みんながつづきました。しかし、その犬いぬは、パスと兄きょう
弟だいのように似にていたけれど、やはり、パスではありませんでし
た。政まさちゃんまや、徳とくちゃんまの見みたのは、この犬いぬだとわかると、み
んなは道みちをもどることにしました。

「ああ、ペスは、もう殺ころされてしまったのだらう。」といって、
中なかにも、達たっちやんと正しょうちやんは、ペスを助たすけなかつたのを、後こうか
悔いしながら、木こ枯がらしの吹ふく中なかを、みんなと歩あるいていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「児童読物研究」

1933（昭和8）年2月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔あびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ペスをさがしに

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>